

## (シンポジウム)多職種でつくる子どもの療養環境 -GWCの取り組み

著者名	高木 志帆
雑誌名	東京女子医科大学看護学会誌
巻	16
号	1
ページ	55-55
発行年	2021-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.20780/00032785">http://doi.org/10.20780/00032785</a>

## 多職種でつくる子どもの療養環境—GWC の取り組み

高木 志帆

(東京女子医科大学病院 小児看護専門看護師)

高度な医療を提供する大学病院では、入院・外来を問わず病院の様々な場所で子どもが医療を受けている。そして、多くの専門職が子どもとかわっている。成人患者と同じ環境のなかで、日常生活とは異なる特殊な体験に満ちた時間を過ごし、「病院だから、病気だからしかたない」と遊びや学びを制限される子どもも多い。子どもにかかわる医療者は、子どもにとって非日常の医療の場を、子どもが医療を受けながら成長発達する生活の場として整えていく必要がある。ここでは、大学病院において多職種が連携して取り組んだ子どもの療養環境改善のための活動を紹介する。

東京女子医科大学病院では、2007 年に GWC (Growth With Children) というワーキンググループが発足した。GWC は子どもとともに成長することを意味しており、大学病院における子どもの療養環境を少しでも良い方向に変えたい、できることをやってみようという思いをもつメンバーが集まっている。GWC の活動が始まるまで、子どもに携わる医療者は各個人や各部署単位で考え、困りをどこに相談したらいいか迷い、自分たちにもっとできることはないかと悩みを抱えていた。そのような状況のなかで GWC が発足し、子どもの療養環境の改善を図ることを目的に活動を開始した。GWC は、子どもに携わる機会のある多職種、大学看護学部の小児看護学教員、大学院生がメンバーとして活動しており、病院全体の横断的な仲間で作る職種や職位の垣根を超えた自主的なグループを目指している。GWC では、月に 1 度、子どもの療養環境について各専門職がそれぞれの視点で意見を出し合い、メンバー間で方策を検討している。これまで、カラフルユニフォームや子ども用食器の導入、小児病棟のプレイルーム改善、秋祭りの開催、子ども憲章の作成等に取り組んできた。臨床の現場にいと、何かを変えたいと感じても煩雑な日常に埋もれてなかなか実現しなかったり、各個人や各部署、各専門職単位ではどこにどのように交渉すべきなのか判断することも難しい。しかし、職種や職位の垣根を越えた仲間と目的を持って交流し、多くの知と技を出し合い、刺激し合いながらひとつのことに取り組むことが療養環境改善を可能にした。これらの活動を通して、個々の視野をひろげ、他職種の視点を知ることでも視野拡大へとつながり、医療者の適切な支援が子どもの権利を保障することを学んだ。さらに、それぞれの専門性や役割を再認識し、相互理解を深めることは、チームの士気を高め更なるチーム連携につながっていると感じている。

当院においてこのような多職種連携が継続できているのは、何より看護部の理解と協力があるからこそであり、組織において承認を得ながら活動していることがワーキングメンバーのモチベーションともなっている。今後も子どもの最善を考えた倫理的な実践を積んでいきたい。